

私は文科系の人間なので医学とは関係ない者です。大学2年時に倫理学の教授、望月神父に肉体の倫理もあるということでアレキシー・カレルを紹介され「人間この未知なるもの」を読みました。それ以来、座右の書として甚大なる影響を受けてきました。カレルは学生時代、若い医師の頃、医学の分野で試験を5回ほど落ちている。しかし学位論文は最優秀の結果でありました。

彼は若い医者のときにルルドという奇跡が起こったといわれる場所を訪れました。1858年、ルルドにマリア様が現われ、貧しい娘に掘るように場所を指示しそこから水が湧き出てきました。その水に触れると奇跡的な治癒が起こり大問題となりました。なぜなら当時の科学の流れから見ると全く逆行する流れだったからです。1854年に法王ピオ9世が「聖母マリアは罪なくしてキリストを懐妊した」「キリストは神であり、キリストを生んだ母親に原罪があったわけではない」というドグマを決めたために、カトリックから多くの信者が離れていきました。その後、1870年にこの法王は「法王の座から宣言したことは誤りえない」ということを教義としたため、当時のインテリジェンスのすべてから人類進歩の敵という烙印を押されました。このような背景があったためにフランスの田舎にマリア様が現れたために大騒ぎとなったのです。それから半世紀後、多くの治癒例があったために巡礼団の最後の望みとして医者とともに多くの人ルルドを訪れました。カレルも重病の結核患者とともにこのルルドを訪れ、彼の目の前で瀕死の患者が水に浸されることでみるみると治癒していき、その後短期間で完治しました。その後、彼はロックフェラー研究所で研究をし、1912年にノーベル生理学医学賞を外科医として血管縫合の業績でもらいました。そのほかにも体液が汚れなければ臓器は死なないという仮説を立て世界で初めて臓器培養をハトで行い成功するなど、カレルは医学者として第一人者でありました。

カレルは61才頃から書籍を書き始めますが「医学はどんどん発達しているが人間はわかっていないのではないか？」という疑問を意識し始めます。彼は医学が専門化、細分化が進んだために人間全体というものがわからなくなっているのではないかということで「人間、この未知なるもの」を著しました。彼の

晩年の著書に「ルルドへの旅」というのがあり、その一章で「我々はデカルトの後を追ってパスカルを忘れていたのではないか」ということを言っています。これは今の科学の根本問題をついていると思われまます。ご存知のとおりパスカルは人間の精神は「幾何学的精神」と「繊細なる精神」とがあるといいました。幾何学的精神を簡単に言えば研究して数値に表せる研究で、これがどんどん進めば計算のもとに人が火星に立つこともできるということです。パスカルはこれとは全く異なる精神の働きがあるのではないかとということで繊細なる精神を示しました。最近、言語学、認知言語学、認知学でクオリアが出て来ました。クオリアという言葉はクオリスというラテン語の複数の中性名詞で性質といったようなものです。これは脳の研究が盛んで脳の細かなところまで分析できシナプスの状況や血流など脳の現象を把握できます。これが幾何学的精神です。一方、本人が悲しんでいたり喜んでいたりすることは脳の状況から第三者は判断することが出来ません。このように幾何学的精神ではつかめないもの、今までの手法ではわからないもの、これがクオリアです。

人間とはレントゲンや細胞の一部からだけではわからないのです。専門性が進むということは盲人象をなでるということになる。これよりも象としてわかるにはスケッチなどで人間をその傍に描くほうが大きさなどがわかり象を理解できます。これがカレルが「人間、この未知なるもの」で示そうとした人間像です。

このカレルの人間像から教えられることが多く、その中で適応能力というのがあります。これを簡単に言うと靴の底は歩けば減っていき、いずれはなくなりますが、人間は歩いて足の裏が減って骨が出るということはないので適応していると言えます。カレルは進化は適応能力だということを明確に述べています。西原先生は生物が海から上陸したということを重力の面から感激的に示されています。適応しながらだんだん進化するということを示しました。人間も生物界も適応という能力を存在の根幹に据えないとわからないことがあるということカレルは非常に強く主張しています。中世の人があれだけ勇敢で丈夫な人たちだったのは寒さや空腹に耐えたりして適応し、強くなったのだと例をあげて言っています。使わないと衰えるというラマルクの用不用の法則を西原学説でも用いています。たとえば現代生活で夏は冷やし冬は暖めるというのが適応能力を衰えさせるという意味でよくないとカレルは言っています。このように適応能力を余り使わないと人間の存在の根幹に関わるとも言っています。適応能力が無くなると肉体的にも精神的にもおかしい人が出てくるとも述べています。問題となった戸塚ヨットスクールですが当初は本当の精神病患者と甘やかされて育った子の区別が付かず、精神患者のかたに事故が起りましたが、戸塚ヨットスクールでは適応能力を根源から直すということをやっています。

最近の極端に甘やかされて育った子は無能で生意気であります。教育学者の金沢嘉一氏のような教育学者たちによると甘やかされて育った子は十年も二十年も甘やかされて育った結果なので治すのにも同じだけの期間がかかるといいます。ところが戸塚氏はこの分野では全く素人でしたが一週間で治せるといいます。事実、ヨットを転覆させておぼれる寸前という状況を何度も経験させると目が輝き始め一週間ほどで適応能力がよみがえってきて治るのです。私は適応という概念をカレルから学びました。そして適応という概念が進化の中心となることを実験進化学の西原先生から学び感銘を受けました。

もうひとつはストレスです。最近ではストレスがすべての病気の元と考えられ悪いといわれますが、カレルはフロイトに関して鋭い指摘をしています。フロイトの例はみな正しいが病人を対象にやっているから、あのような結果になるのであって健康な人を対象に行えば反対の結果になっていたであろうというような趣旨のことをカレルは言っています。普通はストレスに耐えるとどんどん強くなります。たとえばオペラ歌手や舞台俳優は舞台に立つともものすごいストレスですが、これを越える努力をしているから何かをなすことが出来るのです。色々な弊害はありますが受験勉強などは若い頃にストレスに耐えることを身に着けるといふ必要な面もあったように思います。語学を習得するにしても論文を書くにしてもものすごいストレスですが、これに耐えなければ語学を習得することも論文を書き上げることも出来ません。それでもストレスに耐えられない人がいます。性欲も抑えればその人が強くなり能力が伸びると言われています。男性で金抜きした人が偉大になったためしはありえないとカレルは書いています。今の子供は耐えるということが少ないと思います。

病人からのみの観察からえられた人間観というのは歪んでいると思うので、健全な人を観察して作った医学というものがなくてはならないと思います。しかし今は医学というのは病気の研究が主であります。健康な人がどうして健康なのかの研究のほうが重要な気がします。そうすると適応にしる、ストレスにしる、忍耐にしる、健康な人にとってはその人を偉大にした基盤であったということがわかるし、それに基づかない教育学は駄目です。

カレルの一番重要なところは、ルルドの奇跡の研究です。人間という存在というものが人格、魂、霊魂など解剖学的限界を越えて存在するかということ。養老先生の本が好きでずっと読み続けているのですがその中に「バカの壁」という本があり、実によい本で感心しました。次いで「死の壁」という本が出され、私の立場から言えばこれは養老先生の死の壁です。養老先生は解剖学者なので当然なのですが、人間は解剖学的な境界に何もない見えないものはないという立場です。しかしカレルは違う立場です。彼は祈りについて述べていますが、祈っている人がそばにいたり脇にいてだけで奇跡は起こりうると述べて

います。他の例で、当人が祈られていると知らなくても治るといふ例はいっぱいあります。祈りというの是一種のエネルギーのようなものか、もしくはもっと神秘的なものかはわかりませんが解剖学的な境界を超えて働くものがあると世界一の解剖学者であり外科医、カレルが実例をあげて言っています。これがカレルの人間観の究極だと思えます。つまりカレルは人間は解剖学的限界を超えた存在でもあると言っています。これは人類の偉人すべてが認めたことであり偉大な宗教家でこれを認めない人は一人もいません。パスカルは幾何学的精神の天才ですが、クオリアの世界があることを知っていました。クオリアの世界とは、祈りとか精神とか訳のわからないエネルギーとされていましたが、これも人間の一部であるというものです。宗教では解剖学的な存在の人間が消えても非解剖学的な人間は残るといいます。一流の学者であり政治家であるスエーデンボリは中年ごろから靈魂が見えるようになったり、遠くの火事まで見えるようになりました。カントは靈魂について本を書き、その本の中でスエーデンボリのように靈魂が見える世界を論じています。カントは慎重に考察した結果これは嘘ではないと判断したが夢のようなものではないかと言っています。他人が検証できないからです。カントは人間のクオリアの部分に関心を持ってこれを否定しませんでした。自然科学が進んだ結果、この境界線がはっきりしてきて、パスカルのほうが正しくデカルトだけでは駄目であるとわかってきたように思えます。アメリカでもハーバードなどの一流大学で、お祈りなどが医学部の研究に組み込まれ研究されています。カレルは今までの幾何学的精神でできた医学だけでなく解剖学の境界を超えた人間も含めた人間というものの研究が必要であると考えました。カレルはアメリカに行きましたが、愛国者である彼は第一次大戦のときも第二次大戦のときも母国フランスに帰って来ています。しかしフランスがドイツに破れたとき、カレルは適応能力が衰えるような生活様式がフランス人を弱くしたと考えました。当時のビシー政権のペタン元帥がフランス人の作り直しから始めなければならないと考え、フランスに人間研究所を作ることをカレルに依頼しましたが、残念ながらカレルが戦時中に病死したために実現はしませんでした。今は自然科学が発達したために、かえってもう一つの人間の面がはっきりとわかるようになって来ました。人間との関係において別の視野から幾何学的精神の医学だけでなく繊細なる精神も含めた研究をするということで西原先生はヤング人間研究会を設立したと思えますので非常に期待しております。